

(2) 副手として医局勤務

医学部を卒業しただけでは医師になれない。学生時代には患者を診ることはできないからである。今でいう「研修医」、当時は「副手」として、診察の訓練を受けなくてはならない。加藤は佐々貫之が主宰する医局に配属され、のちに血液学の大家となる中尾喜久と三好和夫に指導を受けることになった。加藤にとって医者の世界は、子どものときから慣れ親しんだものであった。しかし、中尾と三好が指導した実験科学の方法は徹底していて、加藤はふたりから医学の方法、あるいは科学の方法の基本を叩きこまれることになった。

中尾は「それだけの事実から、そういう結論は出ないね、そうであるかもしれないが、確かにそうだとはいえない」と諭し、三好は「自分で測りなおさなければだめだ。誰の数値でも、それをもとにしてものがいえると思ったら、大まちがいで」釘を刺した（『羊の歌』「内科教室」）。

このような実証主義的な方法は、のちに加藤の基本的な方法として育っていった。美術を論ずるときにも、実際の作品を観ない限りはその作品を論じない、文学を評するときにも、実際の作品を読まない限りは評しない、という態度は、厳しい医学的訓練の結果であろう。

軍医として召集される医者も増え、病院の医局員の数は少なくなり、加藤は多忙を極めるようになる。そのうえ東京の交通事情が悪化し、通勤にも支障をきたすようになると、病室の一部を泊り込み用の部屋とすることが暗黙の裡に認められるようになった。加藤はいつのまにか2等病室の一部屋に住み、そこに小型の蓄音機とフランス文学の書物を持ち

こんだ。かくして、昼間は病棟で患者と接して治療に当たり、夜間は部屋に戻り、どんなに疲れていようとも、西洋古典音楽を聴き、フランス文学を読むという日々を送った。